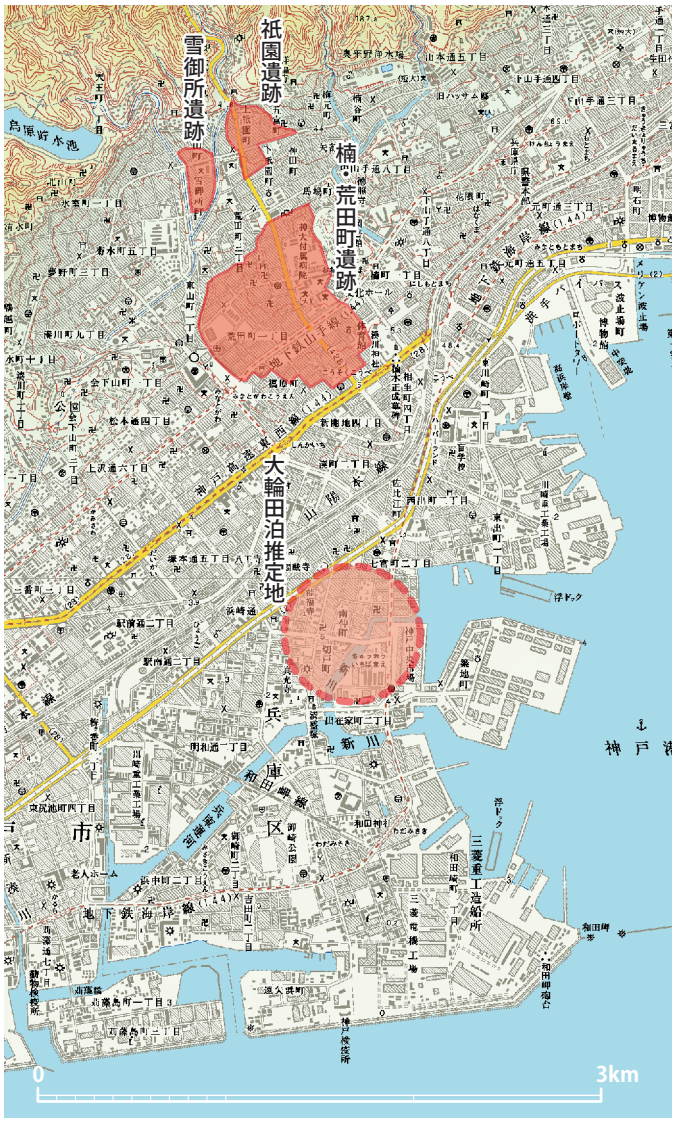
祇園遺跡第14次調査

はじめに

今から840年ほど前の治承４(1180)年、『山槐記』という貴族の日記に、平清盛について「近年摂州平野の勝地を占め、遁世退老の幽居となす」と書かれています。

摂州平野とは、摂津国八部郡平野、現在の神戸市兵庫区上祇園町周辺のことをさしていると考えられます。清盛はこの「平野」に築いた屋敷から、都の政治への指令をだす一方、すぐ南に位置する宋（中国）との貿易の拠点である大輪田泊の経営に力を注いだとされています。

このように生み出された都市は、やがて清盛による遷都、新京「福原京」（和田京）建設計画へと続いていきます。



祇園遺跡位置図

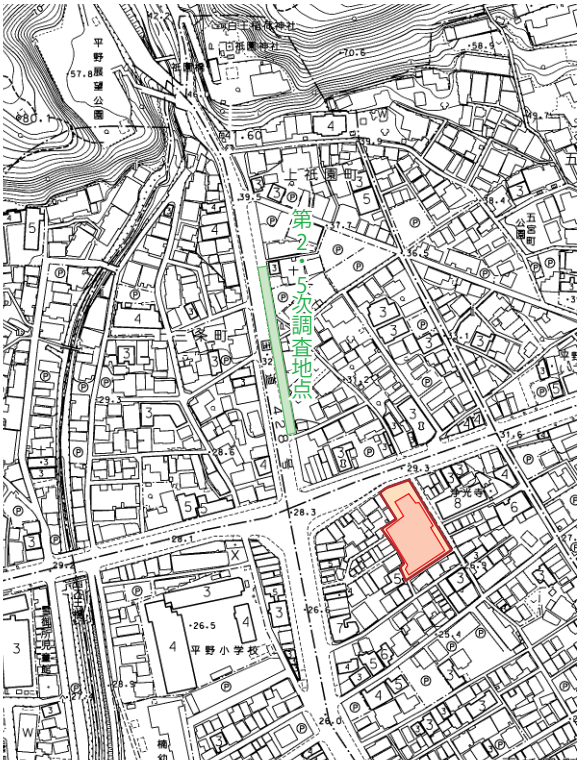
祇園遺跡は、この「平野」の地にひろがる遺跡で、まさに「福原京」の中枢部にあたる場所といえます。

祇園遺跡について

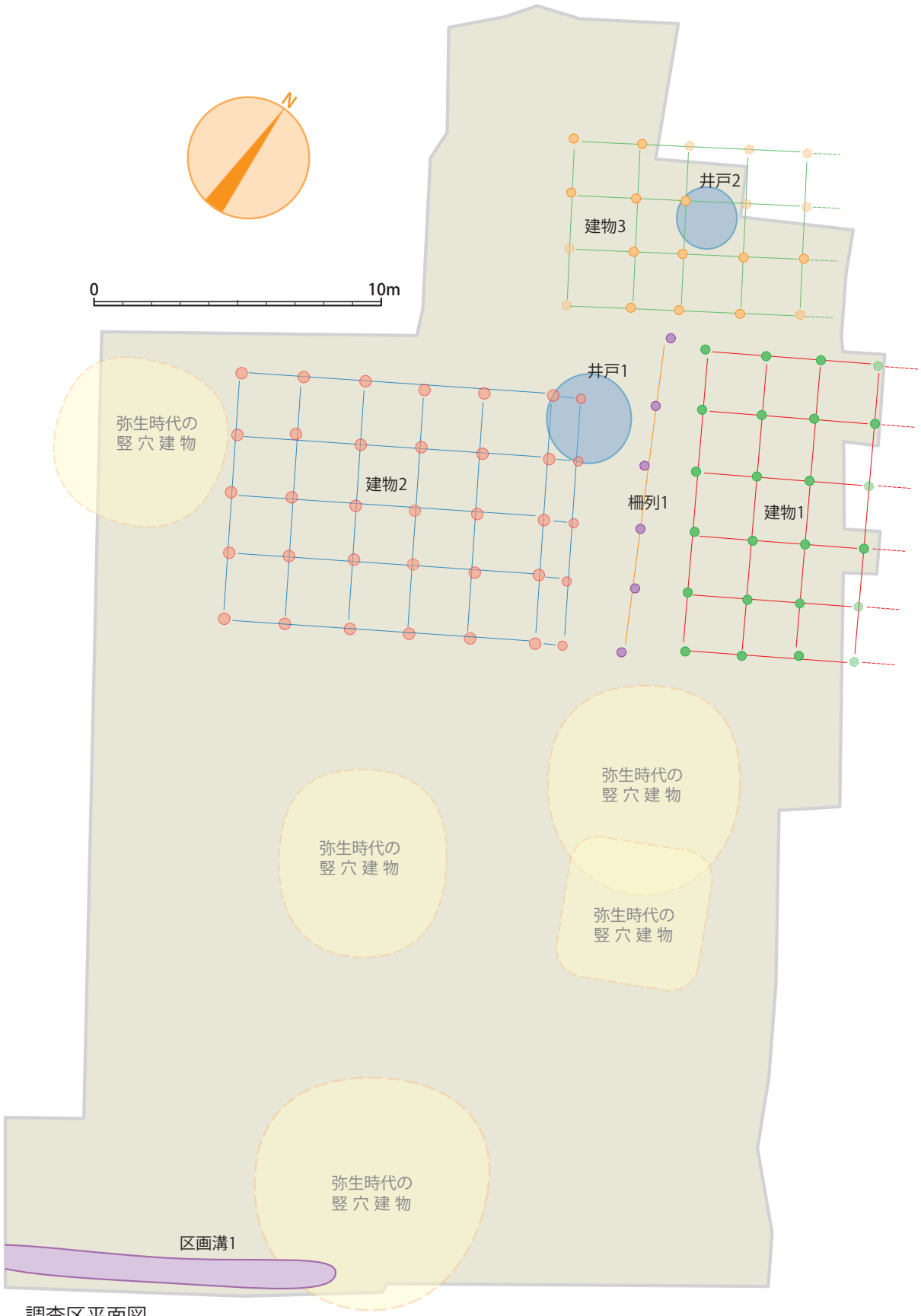
祇園遺跡は、六甲山系から注ぎ込む天王谷川によって形成された扇状地の頂部に位置しています。

平成６年度に実施した第２次調査と、その後の第５次調査において、12世紀後半から末頃にかけての貴族の邸宅に伴うと推定される庭園遺構が発見され、注目を集めました。出土した多量の土器や瓦は、京都で使われていたものも含まれていました。さらに、日宋貿易を物語る陶磁器も見つかっています。

祇園遺跡の南に拡がる楠・荒田町遺跡では、神戸大学医学部附属病院構内において、平安時代後半の大規模な二重壕が見つかっており、これも平家関連の遺構と考えられています。さらに同時代の建物や溝の跡なども確認しています。



第14次調査地点位置図（1/5.000）



調査区平面図

建物1　南北５間（10.7　m）× 東西３間（6.0m）以上

建物2　南北４間（8.6m）× 東西５間（11.8m）
東側に半間の庇もしくは縁

建物3　南北３間（5.8m）× 東西４間（8.4m）以上

空から見た調査区

井戸を廃棄する際の祭祀に使用した土器

区画溝から出土した陶磁器（白く細長いのは水注の口）

調査区南端の区画溝（西から）

発掘調査区の全景（北から）

丘陵裾のこのあたり一帯に、平家に関係する建物群が広がっていたと考えられます。

調査概要

発掘調査によって、弥生時代中・後期の竪穴建物、平安時代後期の掘立柱建物およびこれに伴うと考えられる柵列、井戸、溝などが見つかりました。

平安時代の建物群は、柱を直接地面に埋め込む構造で、掘立柱建物と呼んでいます。調査区内で、３棟を確認しました。

建物1の規模は、南北５間（10.7m）、東西３間（6.0m）以上です。その西側に並ぶ建物2は、南北４間（8.6m）、東西５間（11.8m）で東側に半間の庇（ひさし）もしくは縁（えん）が付きます。その北側の建物3は南北３間（5.8m）、東西４間（8.4m）以上です。

柵列は、南北方向の11.1mで、建物1と建物2の間を区切っています。

これらの建物と柵列は、おそらく同時に存在していたものと考えられます。

井戸は２基見つかっており、ともに上部は壊されて井戸枠などが抜きとられています。井戸1の掘形は直径約３mほどで、廃棄するときの祭祀に使用した大量の土器類が出土しました。それらの多くは土師器の皿や瓦器の椀・皿ですが、白磁の碗や合子、烏帽子の破片なども含まれていました。

また、井戸2の掘形は直径２mほどで、こちらは大きな石を大量に入れて埋め戻しています。焼けた石材や、建物の礎石も含まれています。

建物2と3は、ともに井戸を埋め立てた上に建てられています。

調査区の一番南の端でみつかった区画溝1は幅0.8～1.0m、深さ0.4mほどで、断面形がU字形で、珍しい白磁の水注や土師器の皿、須恵器の甕、瓦器の椀などが出土しました。この溝は、邸宅内の区画溝と考えられます。

弥生時代中・後期の竪穴建物は、現在5棟を確認しています。なかでも調査区の南端にある竪穴建物1は直径８mと比較的大型で、炭化材や焼土がみられることから、火災にあって焼失したものと考えられます。

今回の調査成果

今回の調査で見つかった平安時代後期の遺構は、12世紀後半から12世紀末に属するもので、福原遷都前後の時期に限定されています。また遺構はすべて一軒の邸宅に伴うものと考えられます。

建物建設以前の井戸内から出土した土器などの内容を見ると、この地域の有力者のものであったと考えられます。その井戸を埋めて建てられた建物や溝は、方位をそろえています。

このことから、当地域が12世紀後半に都市計画がなされ、さらに北120mで見つかっている園池や遺物との関係から、今回見つかった邸宅は、平家に関係する貴族層に仕える地元の有力者のものであった可能性が高いと言えます。

今回の発掘調査および現地説明会の開催にあたっては、株式会社TSKと株式会社島田組の協力を得ました。